201401007B

厚生労働科学研究費補助金
政策科学総合研究事業

若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関する プロモーションプログラムの開発に関する研究

平成 25～26 年度　総合研究報告書

研究代表者　山本 眞由美

平成 27（2015）年 3 月

厚生労働科学研究費補助金
政策科学総合研究事業

若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関する プロモーションプログラムの開発に関する研究

平成 25～26 年度　総合研究報告書

研究代表者　山本 眞由美

平成 27（2015）年 3 月

目次

Ⅰ. 総合研究報告

若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
山本眞由美
（資料 1）『若い男女における結婚・出産についての意識調査』（自記式質問調査用紙）・ 39
（資料 2）『知っていますか？男性のからだのこと、女性のからだのこと ～ 健康で充実した人生のための基礎知識』（既存のパンフレット）・・ 52
（資料 3）DVD 教材の最終原稿 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
（資料 4）『評価質問票 講義前 講義後 』（質問紙） ・・・・・・・・・・・・・・・ 88

Ⅱ. 分担研究報告

1. 高校生と大学生における結婚、挙児希望に関する意識調査 －高校生と大学生で異なるか？－ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
西尾 彰泰、堀田 亮、佐渡 忠洋
2. 平成 25 年度実施「若い男女における結婚、出産についての意識調査」の解析 「子どもが欲しい」という回答をもたらす因子についての検討 ・・・・・・・・・ 100
吉川 弘明、足立 由美
3. 結婚と子ども持つことを望む高校生および大学生の心理 －質問紙結果から－ ・・ 106
佐渡 忠洋、堀田 亮、西尾 彰泰
4. 将来の結婚や子どもを持つことに対する前向きな意識と現在の食知識、食態度、食習慣、食に関する主観的 QOL、及び過去の食体験の関連について ・・・・・・・・・・・・ 114
林 芙美、武見 ゆかり、佐藤 ななえ
5. 思春期後期における結婚、出産のライフデザインに関連する不妊や月経教育との関連に関する調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
髙田 昌代、宮下 ルリ子、安達 久美子、有園 博子、井上 裕子、勝木 洋子、甲村 弘子
6. 経済状態の自己認識と健康意識・行動との関連 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
松浦 賢長、丸岡 里香、仁木 雪子、加藤千恵子、樋口 善之、原田 直樹、阿部眞理子、増満 誠、梶原由紀子
7. 教育用パンフレット「知っていますか？男性のからだのこと、女性のからだのこと」に対する大学生の意識調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
吉川 弘明、足立 由美
（資料 5）学生の皆さんへ パンフレット「知っていますか？男性のからだのこと、女性のからだのこと」についてのアンケート用紙 ・・ 148
8. 教育用パンフレット「知っていますか？男性のからだのこと、女性のからだのこと」に対する大学生（新入生）の意識調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
吉川 弘明、足立 由美
（資料 6）学生の皆さんへ パンフレット「知っていますか？男性のからだのこと、女性のからだのこと」についてのアンケート ・・・・・・・・・・・ 157

9. 既存の教材を使用したライフプランに関する教育講義の実践とその評価 ・・・ 161
西尾 彰泰、堀田 亮、山本 眞由美
（資料 7）講義を受けた学生に対するパンフレット評価のためのアンケート用紙 ・・ 164
10. 高校生・大学生の妊娠・出産に関する知識量と教育用 DVD
「知っていますか？男性のからだのこと、女性のからだのこと
－健康で充実した人生のための基礎知識－」の視聴効果 ・・・・・・・・・・ 166
堀田 亮、佐渡 忠洋、西尾 彰泰

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

教育用 DVD・雑誌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176

Ⅳ. 研究成果の刊行物・別冊

①第 29 回世界女医会国際学術総会（29th International Congress of the Medical Women's International Association）抄録集 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178
②金沢大学保健管理センター年報・紀要 No. 7（通巻 41） ・・・・・・・・・・・ 179
③第 33 回日本思春期学会総会学術集会抄録集 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
④第 57 回東海学校保健学会総会プログラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 184
⑤CAMPUS HEALTH 52(1) 154-156, 2015 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185

Ⅰ．総合研究報告

平成 25～26 年度厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）

総合研究報告書

若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究

研究代表者　山本 眞由美　岐阜大学保健管理センター　教授

研究要旨

【背景】

近年、我が国では晩婚化・晩産化を伴う少子化が進行しており、2013 年の合計特殊出生率は 1.43 であった。晩婚化は妊娠適正年齢を逃すことによる不妊の増加を、晩産化は母体の高齢化によるハイリスク妊娠の増加をもたらす要因となりうるため、様々な対策アプローチが必要である。高齢化が進む傾向にある不妊治療の現場においては、「もっと若い時期に、妊娠時期などの人生設計について考える機会を持つことができたなならば、結婚や妊娠の時期をもっと早く迎えていたかもしれない」という思いを持つカップルは少なくないと言われる。そこで、本研究では、若い男女を対象に、妊娠・出産などのライフプランに関する教育を行うことの必要性と有効性、教育すべき内容を検討することを目的とし、この結果に基づいた提言をめざした。まず、若い男女の結婚・出産に関する意識や知識の実態を調査し、それに影響を与える要因について分析を行い、必要と思われる教育内容、有効と思われる教育方法について検討した。さらに、この結果に基づいた“若い男女が自ら選択する人生設計について質の高い情報を効果的に提供する”授業教材を作成し、この有効性についても検証することとした。

【研究方法】

(1) 若い男女における結婚、出産についての意識調査

全国 6 校の高校生 1,866 人（男性 1,108 人、女性 727 人、性別無回答 31 人、平均年齢 16.5 ± 0.83 歳）、11 校の大学生 1,189 人（男性 267 人、女性 914 人、性別無回答 8 人、平均年齢 19.9 ± 1.81 歳）合計 3,055 人を対象に、結婚、出産に関する意識調査を実施した。

質問用紙は、性別、年齢、家族構成、将来のキャリアデザイン、妊娠、出産、健康観などを含む A4 版、全 12 頁からなる自記式質問調査用紙 **『若い男女における結婚、出産についての意識調査』（資料 1）**（無記名）を作成した。質問内容は、1.学生の基礎情報、2.生活や意識について、3.食事や栄養について、4.結婚、出産について、5.女性の方への質問の五つのセクションから構成され、全 56 問であった。

この調査結果を、次のような視点で統計解析し、分析した。

① **結婚や挙児希望に関する意識の実態を、高校生と大学生の比較も含め明らかにする**
（研究分担者：西尾、研究協力者：堀田、佐渡）

② **「子供が欲しい」という回答をもたらす因子について抽出分析する**
（研究分担者：吉川、研究協力者：足立）

③ **結婚と挙児を望む高校生と大学生の心理を、未来観や家族観などとの結びつきから解析する**
（研究分担者：西尾、研究協力者：佐渡、堀田）

④ **将来の結婚や挙児に対する前向きな意識をもつことと、食知識、食態度、食行動、食に関する主観的 QOL（SDQOL）、過去の食体験との関連を検討する**
（研究分担者：林、研究協力者：武見、佐藤）

⑤ **結婚、出産のライフデザインと、不妊教育や月経教育との関連を検討する**
（研究分担者：高田、研究協力者：宮下、安達、有薗、井上、勝木、甲村）

⑥ **経済状態の自己認識と健康に関する知識・意識・行動の関係を検討する**
（研究分担者：松浦、研究協力者：丸岡、仁木、加藤、樋口、原田、阿部、増満、梶原）

(2)ライフプランに関する教育をうけた大学生の教育用教材に対する意識調査

（研究分担者：吉川、研究協力者：足立）

既存のパンフレット教材 **『知っていますか？男性のからだのこと、女性のからだのこと～健康で充実した人生のための基礎知識～』(資料2)** を配布し、通読した学生による教材の評価を回収し、分析した。この結果から、大学生が必要としている教育内容を明確にした。

(3)上記(1)(2)の分析結果に基づいた DVD 教材の作成

（研究分担者：西尾、林、山本、研究協力者：堀田）

上記(1)(2)の分析結果から、大学生や高校生に提供すべき内容を明らかにした。そして、大学や高校の講義で使用できる DVD 教材 **『男性のからだのこと　女性のからだのこと　−健康で充実した人生のための基礎知識−』(資料3)** を作成した。

(4)大学生と高校生における妊娠や出産、ライフプランに関する知識レベルと教育効果の調査

（研究分担者：西尾、協力者：堀田、佐渡）

既存のパンフレット教材 **（資料2）** の中から、特に若い男女にとって重要と思われる知識内容を抽出して、質問紙 **『評価質問票 講義前 講義後』(資料4)** を作成した。このうち 1.正しい、2.誤っている、3.わからない、の 3 つの選択肢のうちから一つを選ぶ 13 問について正答を 1 点として 13 点満点中の得点で知識レベルを評価した。正答率が低かった問題の知識内容は教育提供が必要と推察されるため、正答率とその内容について分析した。特に、高校生と大学生や男性と女性で正答率に差があるか比較分析することで、年齢や性別による違いも検討した。一方、既存のパンフレット教材 **（資料2）** を自己学習した場合の前後や、DVD と同じ内容のスライド教材 **（資料3）** を使用して教員が講義した前後においても同様の質問紙 **（資料4）** による回答を受講者に求めた。これらの結果を、DVD 教材 **（資料3）** の視聴前後の変化と比較することにより、それぞれの教育方法の特徴を検討した。

(5)DVD 教材を用いた講義実践による知識レベルの変化

（研究分担者：高田、研究協力者：宮下、安達、有薗、井上、勝木、甲村）

上記(3)で作成した DVD 教材 **（資料3）** を視聴する講義を実践し、その前後で、受講者を対象に **『評価質問票 講義前 講義後』(資料4)** の回答を求め、DVD 教材の視聴前後の変化を検討することにより、DVD 教材 **（資料3）** の教育効果を評価した。この解析では、妊娠や出産、ライフプランに関する知識レベルに対する教育効果に着目したため、対象回答者は女性のみとした。

〔**本研究における倫理的配慮**〕 本調査の実施と分析については、岐阜大学大学院医学系研究科倫理審査委員会で審査され、承認を得た(承認番号 25-268、26-123)。

【結果】

(1) 若い男女における結婚、出産についての意識調査

① 結婚や挙児希望に関する意識の実態(高校生と大学生の比較も含め)

(研究分担者:西尾、研究協力者:堀田、佐渡)

1.人生の中で重視すること

人生の中で重視することを、「勉強」「仕事」「家庭」「趣味」「健康」「友人」「恋愛」「収入」「地位・名声」「社会貢献」「子育て」の 11 項目の中から順序づけさせたところ、男性、女性、高校生、大学生ともに「子育て」は、11 番目と最も関心が低く、「健康」に対する関心が最も高かった。

2.結婚希望、挙児希望、欲しい子供の人数、初産の年齢

結婚希望に関して、「いずれ結婚するつもり」、「一生結婚するつもりはない」、「考えたことがない」の3つから選択回答させたところ、高校生では男性 72%、女性 81%が、大学生では男性 78%、女性 91%が「いずれ結婚する」を選択し、「一生結婚するつもりはない」と答えた者はいずれも 5%以下であった。結婚を希望する年齢の平均は、高校生(男性 25.0±4.0、女性 23.8±2.2 歳)、大学生(男性 26.8±2.8、女性 25.9±1.9 歳)であった。挙児希望に関して、「子供は欲しい」、「子供は欲しくない」の2つから選択させたところ、高校生は男性 84%、女性 88%が、大学生は男性 86%、女性 93%)が、挙児を希望していた。「何歳までに第1子を持ちたいか」という質問では、高校生と大学生で大きな違いがあった。「25 歳までに産みたい」と答えたのは、高校生は男性 30.2%、女性 50.4%であったが、大学生は男性 6.6%、女性 14.3%であった。

3.将来の子育てに関する不安

子供を持つことに対する不安について、「金銭的な不安」「キャリア形成の妨げになる」「ライフスタイルが変わってしまう」「健康上の不安」「家族の要因による不安」「パートナーが見つからない不安」「子供を育てる自信がない」「妊娠や子育てへの知識や情報の不足」の中から複数回答で選択させたところ、高校生・大学生の男女ともに「金銭的な不安」が突出して多かった。次に、「子供を育てる自信がない」、「妊娠や子育てへの知識や情報の不足」が多かった。大学生の女性では、「パートナーが見つからない」も多かった。

4.不妊、妊孕力、不妊治療に関する知識

不妊の定義を知っていたのは、高校生で男性 20.7%、女性 33.0%、大学生で男性 26.2%、女性 36.2%であった。「女性の妊娠する能力が 30 歳を過ぎた頃から少しずつ低下すること」をよく知っていたのは、高校生で男性 13.7%、女性 22.3%、大学生で男性 30.0%、女性 41.9%であった。高校生の男性では、「全く知らなかった」と答えた者が 36.1%いた。不妊治療を受けていても女性の妊娠する能力は年齢と共に少しずつ低下することについて「よく知っていた」と答えたのは、高校生で男性 8.0%、女性 14.1%、大学生で男性 19.4%、女性 31.0%であった。

5.結婚、挙児希望に影響を与える要素

高校生と大学生における「結婚希望」「挙児希望」と、「将来への経済不安」、「実家の経済力」、「現在の健康状態」、「健康への関心」、「主食・主菜・副菜の揃った食事の頻度」との関係、さらに「挙児希望」と「結婚後の就労意識」との関係では、大学生において経済不安の強さと結婚を希望する者の割合のあいだに負の相関が見られた。また、実家の経済力と結婚希望のあいだには正の相関があった。自分の健康に、「あまり関心がない」「全く関心がない」と答えた高校生は、「普通」と回答した者に比し結婚を希望する者が有意に少なかった。大学生では、「健康状態」「健康への関心」と結婚を希望する者の割合に正の相関があり、栄養バランスの揃った食事を取る回数が 1 日 1 回未満(しかない)群で、結婚を希望する者の割合が高い傾向にあった。経済不安が「強い」と回答した高校生は、「普通」と回答した高校生よりも、子供を希望する者の比率が有意に低かった。大学生では、経済不安の強さと子供を持ちたい者の割合は負の相関を示した。「実家の経済力」「現在の健康状態」「自身の健康への関心」は、高校生・大学生ともに、挙児希望に対して正の相関関係を示した。

② 「子供が欲しい」という回答をもたらす因子について抽出分析する

(研究分担者:吉川、研究協者:足立)

高校生は「子どもが欲しい」と答えた者は 87.7%で、「結婚するつもり」と答えた者の 95.8%は「子どもが欲しい」と思っていた。高校生では「子どもが欲しい」と「いずれ結婚するつもり」との回答には相関があった($p<0.0001$)。大学生においても、「子どもが欲しい」と「結婚するつもり」には相関があった($p<0.0001$)。「自分の育ったような家庭を自分も築きたいか」という質問の回答「1. 思う、2. 思わない、3. わからない」と「子どもが欲しい」「欲しくない」との因果関係を名義ロジスティック解析で分析したところ、「自分の育ったような家庭を築きたい」ことと「子どもが欲しい」とは因果関係があった(高校生;$p<0.0001$, 大学生;$p<0.0001$)。「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」と「子どもが欲しい」の因果関係をみたところ、「食事が楽しかった」と答えることと、「子どもが欲しい」と回答することには因果関係があった(高校生; $p<0.0001$、大学生;$p<0.005$)。また、高校生、大学生ともに、「部活動をしていた」ことと「子供が欲しい」ことに因果関係があった(高校生:$p<0.0002$、大学生;$p<0.0001$)。しかし、「飲酒」「喫煙」「運動習慣」「自分の健康状態」と「子どもが欲しい」の間には因果関係はなかった。大学生では「自分の健康に関する関心」と「子どもが欲しい」と思うことの因果関係があった($p<0.0005$)。

③ 結婚と挙児を望む高校生と大学生の心理を、未来観や家族観などとの結びつきから解析する

(研究分担者:西尾、研究協力者:佐渡、堀田)

調査で得られた結果を心理学的検討に値する項目に着目して、4 カテゴリー26 項目に整理し、26 項目の出現度数を高校生と大学生とで比較したところ、21 項目に差が認められ、結婚と子どもを持つことを望む者は大学生の方に多かった。さらに、高校生と大学生のデータを、それぞれクラスター分析で検討したところ、高校生の高クラスターは、Ⅰ(C9:人生で地位や名声が重要、C10:人生で社会への貢献が重要、C11:人生で子育てが重要、A6:家の経済状態はよい、C7:人生で異性との付き合いが重要、C8:人生で収入や財産が重要)、Ⅱ(A2:女性、B4:体型が気になる、D1:将来は経済的に不安、C6:人生で友人付き合いが重要、C3:人生で円満な家庭が重要、D4:今の家庭が理想的、C5:人生で健康な体が重要、C1:人生で勉強が重要、C2:人生で仕事・アルバイトが重要、A1:男性、C4:人生で趣味やスポーツが重要)、Ⅲ(D2:将来は結婚したい、D3:将来は子どもが欲しい、

A3:実家に父親がいる、A4:実家に母親がいる、A5:実家にきょうだいがいる、B1:1 年内に部活をしていた、B2:食事時間が楽しい、B3:食卓の雰囲気は明るい、A7:自分の健康に関心がある)であった。一方、大学生の高クラスターは、Ⅰ(C9:人生で地位や名声が重要、C10:人生で社会への貢献が重要、C11:人生で子育てが重要、C8:人生で収入や財産が重要、C7:人生で異性との付き合いが重要、A6:家の経済状態はよい、C2:人生で仕事・アルバイトが重要、A1:男性、C4:人生で趣味やスポーツが重要)、Ⅱ(A2:女性、B4:体型が気になる、D2:将来は結婚したい、D3:将来は子どもが欲しい、A4:実家に母親がいる、B2:食事時間が楽しい、A7:自分の健康に関心がある、A3:実家に父親がいる、A5:実家にきょうだいがいる、B1:1 年内に部活をしていた)、Ⅲ(B3:食卓の雰囲気は明るい、D4:今の家庭が理想的、C3:人生で円満な家庭が重要、C5:人生で健康な体が重要、C6:人生で友人付き合いが重要、D1:将来は経済的に不安、C1:人生で勉強が重要)であった。このように、高校生と大学生とでは質を異にするクラスターが導き出され、社会観や家族観は男女で異なっていた。特に大学生では、男性は社会的な活動に意識が向き、女性は結婚と子どもを持つことに加え、家族や家庭に意識が向いていることが示された。

④ 将来の結婚や挙児に対する前向きな意識をもつことと、食知識、食態度、食行動、食に関する主観的 QOL、過去の食体験との関連を検討する (研究分担者:林、研究協力者:武見、佐藤)

妊産婦には重要な栄養素である葉酸に関して、男女とも知らない者が多かったが、葉酸に関するいずれの項目でも女性の方が適正回答者は多かった($p<0.001$)。食態度に関する質問の中で、料理の楽しさで女性の方が有意に「楽しい」と回答した者が多かった($p<0.001$)。料理(調理)に関する自信を問う質問では、男女とも「自信あり」と回答した者が少なく男女差はなかった。現在の食習慣の中で、栄養バランスに関する質問では、男性で適正者が有意に多かった($p<0.001$)。野菜料理に関する質問では、有意な男女差はなかった。過去の食体験と SDQOL に関する質問では、いずれも女性の方が良好な回答をする者が多かった($p<0.001$)。男性では、現在の栄養バランスが良好な者において、結婚や子どもを持つことに対する前向きな態度が示された。過去の食体験は、性別に関係なく結婚・挙児希望の両方と関連していた。

⑤ 結婚、出産のライフデザインと、不妊教育や月経教育との関連を検討する

(研究分担者:高田、研究協力者:宮下、安達、有薗、井上、勝木、甲村)

1.不妊の知識について

「不妊の定義」を正しく知っていると回答した者は、全体で 34.6%(高校生 32.9%、大学生 36.0%)であった。「加齢に伴い不妊治療の成功率が低下する」ことを知っていると回答した者は全体で 32.5%(高校生 22.1%、大学生 40.8%)であった。女性のみに対する質問で、月経痛があると回答した者は全体で 76.7%(高校生 77.2%、大学生 76.3%)、月経痛で「寝込んだり学校を休んだりする程日常生活に支障がある」と回答したものは全体の 28.9%(高校生 29.7%、大学生 28.3%)であった。月経痛があると回答した者のうち、「鎮痛薬を服用している」と回答した者は 50.6%であった。鎮痛薬を使用しない理由は「薬に頼りたくない」との回答が 37.0%で最も多かった。全体の約6割が誰かに月経痛を相談したことがあるものの、その約 5 割は母親だった。

2.不妊知識と結婚・挙児希望との関連

「加齢に伴う妊孕力の低下」や「加齢に伴う不妊治療の成功率低下」の知識がある者ほど「いずれ結婚するつもり」の割合が有意に高く、「結婚を考えたことがない」者の割合が有意に低かった($p<0.05$)。「不妊の知識」や「不妊の定義」を知っている者ほど挙児を希望する割合が有意に高かった($p<0.05$)。

⑥ 経済状態の自己認識と健康に関する知識・意識・行動の関係を検討する

(研究分担者:松浦、研究協力者:丸岡、仁木、加藤、樋口、原田、阿部、増満、梶原)

1.経済状態の自己認識

経済状態の自己認識(上中群と下群の分類)に関して、大学生と高校生で有意差はなかった。

2.健康意識

「上中群」の方が、「健康状態が良い(とても良い・まあ良い)」と認識しているものが有意に多かった($p<0.001$)が、「自分の健康への関心」に有意差はなかった。

3.体型に対する意識

「自分の体型が非常に気になる」と回答した者は「下群」の方が有意に多かった($p<0.01$)。

4.健康関連行動

「経済状態の自己認識」と「喫煙行動」「飲酒行動」「運動」の関連では、有意な関連はなかった。

5.食事・食卓に対する認識

「上中群」の方が「食事時間が楽しい」($p<0.01$)、「食卓の雰囲気は明るい」($p<0.001$)、「日々の食事に満足している」($p<0.01$)、「小学生の頃食事が楽しく心地よかった」($p<0.001$)と回答した者が有意に多かったが、「食事の待ち遠しさ」や「野菜料理の摂取」について有意差はなかった。

6.将来の生活への考え

「上中群」の方が、「いずれ結婚するつもり」($p<0.001$)、「将来子供がほしい($p<0.01$)、「自分が育ったような家庭を自分も築きたい」($p<0.001$)と回答した者が有意に多かった。

7.妊娠、避妊、月経等に関する知識

「上中群」の方が「加齢に伴う妊孕力の低下」について知っていると答えた者が有意に多かった($p<0.05$)が、他の知識、避妊方法の選択意向、月経痛の経験などと「経済状態の自己認識」の間に有意な関連はなかった。

(2)ライフプランに関する教育をうけた大学生の教育用教材に対する意識調査

(研究分担者:吉川、研究協力者:足立)

既存のパンフレット(資料2)の通読後の内容について:

全体の評価は、「興味をもてる」59.9%、「重要である」87.2%と高評価であった。パンフレットの出来上がりについても「大きさは適切である」69.8%、「厚さ(ページ数)は適切である」78.0%、「字の大きさは読みやすい」85.2%、「見やすい・読みやすい」84.5%と高評価であった。パンフレットを「自分が持っておきたい」と回答した者は 49.5%であったが、「友人(男性)に紹介したい」は 30.5%、「友人(女性)に紹介したい」は 29.3%、「交際相手に紹介したい」は 29.2%であった。パンフレットの内容で必要ないと感じた部分を挙げた者は少なかった。既存の内容の中で「必要と思う」と回答された項目は「健康で充実した人生のために」67.1%、「性感染症について」50.2%、「健康は大切(食事、運動、睡眠他)」49.2%であった。パンフレットを宣伝するのに効果的な方法について尋ねたところ、「授業

で配布する」が 58.1%で最も多く、授業で用いられる「ポータルサイトで情報を配信する」が 37.3%で次に多かった。

パンフレットの項目について:

パンフレットに関する評価 10 項目中 5 項目で男女に有意差があった。即ち、女性の方が男性に比し、よりパンフレットの内容が重要であると考え、パンフレットの厚さ、大きさ、読みやすさの評価が高く、パンフレットを持っておきたいと考えることを認めた。所属学部別では、有意差はなかった。

パンフレット評価の男女差・学部差:

パンフレットに必要と思う内容についても有意な男女差のある項目があった。男性が女性より必要と感じた内容は「健康で充実した人生のために($p<0.01$)」と「男性に多い性の悩み($p<0.001$)」で、女性が男性より必要と感じた内容は「女性の月経サイクル($p<0.05$)」「月経に関する悩み($p<0.001$)」「妊娠について($p<0.01$)」であった。所属学部別では、5 項目に有意差があった。「健康で充実した人生のために($p<0.05$)」と「男性に多い性の悩み($p<0.05$)」が必要と回答した者は理科系の方が多く、「月経に関する悩み($p<0.05$)」を必要と回答した者は文科系の方が多かった。

(3)上記(1)(2)の分析結果に基づいた DVD 教材の作成

(研究分担者:西尾、林、山本、研究協力者:堀田)

上記(1)(2)の結果に基づいて、女性のからだのこと、男性のからだのこと、妊娠について、リプロダクティブヘルス、出産年齢、いきいき健康であるための食事の 6 つのセクションからなる DVD 教材を作製した。**(資料 3)**が、DVD 教材作製の最終原稿である。

(4)大学生と高校生における妊娠や出産、ライフプランに関する知識レベルと教育効果の調査

(研究分担者:西尾、協力者:堀田、佐渡)

教育介入前の知識レベル:

教育介入前の調査質問票の回答合計点の平均は、全体で 7.12±2.65 点(高校生男子 5.21±2.66 点、高校生女子 6.82±2.38 点、大学生男子 7.09±2.59 点、大学生女子 8.20±2.27 点)であった。介入前の回答で、高校生、大学生ともに正答率が低かったのは、「排卵期の時期」「分娩予定日」「不妊症」「性感染症」に関する設問であった。「緊急避妊薬」に関する設問は、高校生で 22.6%の正答率であったが、大学生は 43.9%であった。妊娠・出産に関する知識量について多重比較を行うと、大学生女子、大学生男子、高校生女子、高校生男子の順に多い結果になった。

教育介入前後の知識レベルの変化:

介入前に高い正答者数、正答率を示した設問は、介入後も高い値を示していた。介入方法ごとに結果を見ると、高校生では DVD 教材の介入群の正答率が最も低かった。一方、大学生では DVD 教材の介入群の正答率が最も高かった。改善率は、どの設問も概ね 60%以上の値を示していたが、介入方法ごとに見ると、高校生では DVD 教材介入群での改善率が低い設問があった。大学生では 13 問中 10 問で DVD 教材の介入による改善率が最も高かった。

教育介入方法による介入効果の比較:

教育介入前後での評価質問紙の合計点の変化は、高校生男子では DVD 教材(2.66±3.89 点)よりも講義(4.11±2.69 点)パンフレット(4.35±2.83 点)を用いた方が、高校生女子では DVD(2.71±2.83 点)よりもパンフレット(3.72±2.35 点)を用いた方が変化点数は大きかった。大学生男子ではパンフレ

ット(1.05±1.50 点)よりも DVD(2.60±2.45 点)、講義(2.74±2.67 点)を用いた方が、大学生女子ではパンフレット(1.00±2.28 点)よりも DVD(2.36±2.13 点)を用いた方が変化点数は大きかった。また、大学生男子(2.74±2.67 点)や大学生女子(2.05±2.32 点)よりも高校生男子(4.11±2.69 点)や高校生女子(3.54±2.41 点)に用いた方が変化点数は大きかった。パンフレットも、大学生男子(1.05±1.50 点)や大学生女子(1.00±2.28 点)よりも高校生男子(4.35±2.83 点)や高校生女子(3.72±2.35 点)に用いた方が変化点数は大きかった。

(5)DVD 教材を用いた講義実践による知識レベルの変化

(研究分担者:高田、研究協力者:宮下、安達、有薗、井上、勝木、甲村)

高校生と大学生の女性全体の正答率は、DVD 教材使用の講義前後で次のように変化した。「不妊の定義」39.2%⇒87.8%、「加齢に伴う妊孕力の低下」83.1%⇒95.9%、「加齢に伴う不妊治療の成功率低下」59.7%⇒88.7%、「月経周期」77.5%⇒86.7%、「月経痛時の鎮痛薬の服用」53.3%⇒89.0%、「排卵時期」27.4%⇒45.6%、「出産予定日」40.1%⇒71.3%、「妊娠中の栄養が胎児に影響すること」96.8%⇒98.4%、「緊急避妊薬の服用時期」39.8%⇒72.7%であった。いずれの問題でも、「わからない」という回答割合は講義後の方が減少していた。

【考察】

(1) 若い男女における結婚、出産についての意識調査

① 結婚や挙児希望に関する意識の実態(高校生と大学生の比較も含め)

(研究分担者:西尾、研究協力者:堀田、佐渡)

晩婚化少子化が進む我が国の現状であるが、高校生・大学生は、結婚・挙児を希望する者が大多数であり、結婚や出産を避けるような意識は見られないことが示された。高校生よりも大学生の方が若干結婚・挙児の希望が増加するものの、結婚をしたい年齢も、高校生と大学生で差がなく、男女ともに 25 歳前後であった。少なくともこの年代では、年齢が上がるにつれ、結婚・挙児希望が下がるわけではないことが判明した。高校生では、自分が 30 歳までに第 1 子を出産すると答えた者が 84.2%で、大多数の高校生は晩産に至るイメージを全く持っていない。唯一、「第 1 子を持ちたい年齢」は男性大学生の方が高校生より高い年齢であったことより、挙児を先延ばしする傾向は、男性において大学生の時期から出現する可能性が推察された。今後は、結婚を先延ばしする傾向にないにもかかわらず、挙児を先延ばしする傾向が、なぜ現れるかについての検討が必要であろう。

ところで、高校生・大学生ともに、結婚や挙児を希望するものが大多数であるにもかかわらず、自分の人生における「子育て」の優先度が低く、多くの高校生・大学生が、将来の「子育て」に対して経済的不安や知識・情報不足による不安を抱いているものが多かった。高校生・大学生が子育てのイメージを持っていないことが、これらの原因であるならば、我が国においては、高校生・大学生が子育ての現場に接する機会が少ないため、高校や大学のカリキュラムや実体験学習の場で、小児に触れる機会を増やし、「子育て」をもっと身近に体験するようなアプローチが必要と考える。

高校生・大学生の、不妊や妊孕力、あるいは不妊治療などに関する知識はおしなべて低かったが、高校生より大学生、男性より女性の方が、知識を有している人数割合は多かった。妊娠や出産への関心の違いによると推察される。したがって、不妊や妊孕力、不妊治療などに関する教育のタイミング

は、妊娠や出産の現実味が帯びてくる大学生や社会人の若年成人が高校生よりも適切な時期だろうと推察された。

結婚希望に影響を与える因子は、高校生で「実家経済力」、大学生で「将来の経済不安」だった。親元で生活している高校生と、自立の途上にある大学生では立場の違いを反映して現れ方は違うものの、経済的背景が「結婚の希望」に影響を与えていることが示された。また、健康状態、健康への関心が高いほど、結婚を希望する者の割合が高かった。挙児希望に影響を与える背景も、高校生では「実家経済力」、大学生でも「将来の経済不安」「実家経済力」「健康状態」「健康への関心」の影響を強く受けることが示された。今日の少子化や晩婚化に対するアプローチの視点としては、「経済」と「健康」であることが高校生や大学生でも重要であることが示唆された。

② 「子供が欲しい」という回答をもたらす因子について抽出分析する

（研究分担者：吉川、研究協者：足立）

高校生・大学生ともに、「将来、結婚するつもりである」、「自分が育ったような家庭を築きたい」、「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」という回答と「子どもが欲しい」という回答は関連深かった。家庭環境が良好であった場合に「子どもがほしい」と思わせることがわかった。育った環境が将来の家庭や挙児に関する希望を左右することを意味し、家庭という最小単位のコミュニティーのあり方が極めて重要であることが示唆された。また、部活動の経験者の方に挙児希望が多いという関連も示された。部活動というコミュニティーにおける他人との関わり合いの中で自己を知ることが、将来の自己実現などを通じて結婚や挙児希望に繋がることが伺われた。これらの要素は、将来、結婚と子どもを持つことを方向づける因子と解釈できる。我々の感じる自己の概念は他人との関係性の中で生まれるものであるが、高校生・大学生がそのことに気づき、自己の将来や人生について考える機会を与えるような教育が必要と考えられた。健全なコミュニティー、機能的な社会の形成の一つである結婚や挙児について高校生や大学生が前向きに考えるためには、他人との関係性の中に生きることの喜びを感じるような体験が不可欠と考えられた。

大学生では「健康への関心度」と「子どもが欲しい」という回答の間に関連があった。この世代がもつ健康への意識は、中高年とは違って「より良く生きたい」という前向きな姿勢の現れと推察できる。そのような将来に希望を持った大学生が、自分の育った家庭の良いイメージと併せて「明るい家庭を持ちたい」「子どもがほしい」「母親や父親の役割を自分の両親と同じようにしてみたい」と思うことは自然な方向性と理解できる。また、大学生では「子どもが欲しい」という回答と「仕事と育児の両立」を望むことに関連があった。大学教育においては、より良い自己の実現に繋がる健康情報の提供が、また、社会政策的には、仕事と育児の両立による挙児希望をかなえるような仕組み作りが必要であると考えられた。高校や大学における健康教育、食育、コミュニケーション教育の充実がや社会政策における子育て支援・職場改善などの取り組みが、少子化対策に繋がることが示唆された。

③ 結婚と挙児を望む高校生と大学生の心理を、未来観や家族観などとの結びつきから解析する

（研究分担者：西尾、研究協力者：佐渡、堀田）

「若い男女における結婚、出産についての意識調査」の 26 項目の出現度数を高校生と大学生とで比較した結果、21 項目に差が認められ、結婚と子どもを持つことを望む者は大学生に多く、特に「将

来は結婚したい」と「将来は子どもが欲しい」の項目では、大学生の方が高校生より有意に多く、大学生の年代になって、心理的な成長を経て結婚や挙児に積極的になる可能性が推察された。

クラスター分析における高校生の 3 つのクラスターは、Ⅰ:地位や社会や経済や収入に関するものが多い社会観に関するクラスター、Ⅱ:健康や自らの家族への態度と関連する健康観・家族観に関するクラスター、Ⅲ:結婚や挙児希望および家族・家庭の状況に関する項目が多いクラスターであった。このクラスターⅢから、結婚や挙児希望の想いと家族・家庭という内的な対象関係には強い心理的な関連があることが示唆された。高校生に「結婚したい」や「子どもが欲しい」との想いを実現できるよう教育的介入をするのであれば、個人の家族・家庭状況を踏まえる必要があると考えられた。一方、クラスターⅢの結婚や挙児希望とクラスターⅠの社会観とは、統計的に遠い関係にあったので、高校生の年代では、自らが家庭を持つことと社会に出ることは、まだ相反する関係にあるのかもしれない。結婚や子どもを持つことに関するプロモーションプログラムを高校生に対して実施する際には、留意すべき点と考えられた。

クラスター分析における大学生の 3 つのクラスターは、Ⅰ:高校生のⅠと類似するものの趣味や仕事に関する項目も入り、一般的な意味での「男性らしさ」と関連するクラスター、Ⅱ:結婚や挙児希望が含まれ、家族の状況に関する項目が入り、「女性らしさ」と関連があるクラスター、Ⅲ:現実的な環境の項目が多く入ったクラスターであった。大学生ではクラスターⅠとクラスターⅡが峻別された点が特徴的である。「男性らしさ」のクラスターに「人生で子育てが重要」が含まれたことは、「イクメン(育児を積極的に率先して行う男性)」という言葉がメディアで度々取り上げられている現状と関係があろう。「女性らしさ」のクラスターでは家族・家庭へと目が向けられ、自らの結婚・妊娠を意識していることが示唆されている。大学生の方が、男性は自らの外部や社会への意識が向上し、女性は自らの内部や家族への意識が向いていると推察された。現在、社会で活躍している女性が増えているものの、大学生の年代の心理的には、男性は家の外へ、女性は家の内へ、という志向性が残っていると考えられた。

④ 将来の結婚や挙児に対する前向きな意識をもつことと、食知識、食態度、食行動、食に関する主観的 QOL(SDQOL)、過去の食体験との関連を検討する

(研究分担者:林、研究協力者:武見、佐藤)

現在の食態度や SDQOL、過去の食体験が良好である者は、将来に対する性別や経済的な不安感に関係なく、結婚や子どもを持つことに対して前向きな態度を持っていることが示された。現在の食生活の質や、過去の食体験は、良好なライフプランニングに影響する可能性が示唆された。子どもの頃から家族での楽しい共食機会を増やすことは、若い男女の結婚や出産に関するヘルスプロモーションにおいても重要な要素であると考えられた。また、料理の楽しさを経験して、食事づくりが楽しいという前向きな姿勢を育めるような教育が望まれる。尚、葉酸に対する知識は極めて乏しかったが、葉酸は妊娠可能な年齢の女性において大切な栄養素であるため、葉酸摂取と胎児の神経管閉鎖障害発症リスク低減に関する知識の普及は必要であると考えられる。

⑤ 結婚、出産のライフデザインと、不妊教育や月経教育との関連を検討する

(研究分担者:高田、研究協力者:宮下、安達、有薗、井上、勝木、甲村)

高校生、大学生の約3人に1人以上はどこかの機会で、不妊についての知識を得ていた。また、加齢に伴う妊孕力の低下、加齢に伴う不妊治療成功率の低下の知識は、大学生で8～9割、高校生で5～6割であった。地方自治体が発行しているパンフレットなどで加齢に伴う妊孕力の低下に関する啓発がされているが、不妊の定義という基礎的な知識が抜けてしまわないよう、不妊に関する系統立てられた知識を獲得する機会が提供されるべきと考えられた。

⑥ 経済状態の自己認識と健康に関する知識・意識・行動の関係を検討する

（研究分担者：松浦、研究協力者：丸岡、仁木、加藤、樋口、原田、阿部、増満、梶原）

実家経済状態に対する自己認識は健康意識や体型に対する意識、将来の結婚・挙児希望、「自分が育ったような家庭を築きたい」との希望と相関が深いことがわかった。結婚や挙児に対する意識・態度の変容を目的とした健康支援においては、これまで育ってきた家庭や現在の生活への肯定的な見方を育む必要があると考えられた。ただ、妊娠等の知識は経済状態認識に影響をうけていなかったことより、思春期・青少年への母子保健教育は一律に全員で知識を身につける仕組みで有効と考えられた。

(2)ライフプランに関する教育をうけた大学生の教育用教材に対する意識調査

（研究分担者：吉川、研究協力者：足立）

既存の教育用パンフレット**(資料2)**を通読した大学生に行ったアンケート調査結果では、「本パンフレットは大学生にとって重要な内容を扱っており、見やすい」との**高い評価を得られた。**性に関する内容については、「重要な内容ではあるものの気軽に他者と話し合うことは抵抗があるため、授業で扱ってほしい」という要望があった。今回の調査対象は、医学系、保健系を除く人文系、理工系、薬学系の学生で、非医療分野で就職する学生が多かったにもかかわらず、高い関心と評価があったことは意義深い。中学・高校において、男女の身体や性感染症、妊娠・出産に関する保健教育を受けているはずではあるが、本パンフレットが目指しているライフプランを考える視点までは中学・高校では難しい。人生を熟慮する機会を提供する役割としての本パンフレットは重要であり、大学生を中心とした高等教育現場において利用価値が高いと考えられた。保健管理施設に専任教員が在籍しない小規模大学での利活用を考えると、eラーニング教材の開発などが今後必要になると考えられた。

(3)上記(1)(2)の分析結果に基づいたDVD教材の作成

（研究分担者：西尾、林、山本、研究協力者：堀田）

上記(1)(2)の結果に基づいて、女性のからだのこと、男性のからだのこと、妊娠について、リプロダクティブヘルス、出産年齢、いきいき健康であるための食事の6つのセクションからなるDVD教材を作製した。DVD教材作製の最終原稿は（資料3）に添付した。

(4)大学生と高校生における妊娠や出産、ライフプランに関する知識レベルと教育効果の調査

（研究分担者：西尾、協力者：堀田、佐渡）

高校生・大学生ともに妊娠や出産、ライフプランに関する知識レベルは低かったが、高校生よりも大学生の方が、女性の方が男性よりも知識量は多いことが示された。年代、性別の違いに関わらず教育・啓発を行っていく必要があるが、特に男性の妊娠や出産に関する知識は不足しており、教育の必要性が示唆された。排卵期、分娩予定日、不妊症、性感染症に関する設問は、高校生、大学生ともに正答率が低かった。妊娠、出産を計画する上で、排卵期や分娩予定日に関する知識を持つこと

や、不妊症や性感染症など妊娠を妨げる要因について知ることは肝要であるため、今後の学校教育において重点的に指導していくことが求められる。緊急避妊薬に関する知識は高校生において不足していた。望まない妊娠は若年層で増加傾向にあるため、高校生年代から、正しく教育していく必要性も示された。

教育介入効果は、DVD、講義、パンフレットとも概ね60%以上の値を示し、妊娠・出産に関する知識の獲得に有効であることが示唆された。しかし、排卵期や BMI に関する設問の改善率は全体的に低かった。「排卵は月経開始の 2-3 日前に起きている」を誤りと答えられず、「BMI で 18.5 未満をやせという」を正しいと答えられなかった回答が多かった。排卵についての知識は妊娠・出産の計画に必須で、また、胎児の健康のために母体の適正体重の知識は必要である。実際に計算するなど、もう少し印象に残るような教育方法が必要と考えられた。

介入前後の変化点数を用いて、教育介入効果を比較検討したところ、年代や性別によって有効な介入方法は異なることが示された。つまり、DVD はどの年代、性別においても、介入前後で得点は上昇していたが、高校生では、講義やパンフレットの方がDVDよりもさらに高い改善効果を示していた。大学生では、DVD が他の介入方法よりも高い教育効果があることが示された。従って、教育・啓発活動を行う際には、対象やその環境に応じて教育介入方法を慎重に選択する必要性が示唆された。

(5)DVD 教材を用いた講義実践による知識レベルの変化

（研究分担者：高田、研究協力者：宮下、安達、有薗、井上、勝木、甲村）

今回の検討から、DVD の視聴や講義が不妊や妊孕力の知識の獲得の機会として有効であった。若年女性には月経痛により日常生活に支障が出る月経困難症は少なくない。今回の調査からも、約 7 割に月経痛があり、鎮痛薬を使用する高校生、大学生が約 4 割であった。月経困難症の中には、子宮内膜症や子宮腺筋症など将来の不妊症と関連のある疾患が隠れていることもあるので、産婦人科を受診すべきであるが、月経痛の相談は母親が多かった。月経に関する正しい自己管理についての教育は、本人のみでなく、母親など保護者にも必要と考えられた。高校生や大学生が不妊や月経困難症に関する知識を得る機会は、保健体育授業・講義、社会からの情報であるが、妊娠・出産のライフデザインを考える機会は少ない。今回の DVD 教材を用いた講義が単に知識を提供するだけでなく、このような人生を考える機会も提供する役割を担うと期待される。女性たちが健康に生きるための「自分の体を知る」という健康教育を、若い男女がアクセスしやすい情報源から実施する必要があると考えられた。

【結論】

今回調査した全国の高校生、大学生の回答より次に事が明らかとなった。

1. 大多数が結婚・挙児を希望していた。しかも、その大多数が結婚希望年齢は 25 歳前後、第 1 子は 30 歳までに欲しいと回答した。しかし、現在の意識では、「子育て」の優先度は低く、将来の「子育て」に対して、経済的不安や、知識情報不足による不安を抱いている者が多かった。
2. 挙児を希望することと「自分が育ったような家庭を築きたい」「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」「健康への関心が高い」という回答に関連があった。
3. 現在の食態度や主観的 QOL、良好な良体験と将来の結婚・挙児希望に関連があった。

4. 不妊や月経に関する知識に不足、ばらつきがあった。

5. 将来の結婚・挙児希望は、育った家庭や現在の生活に対する肯定感と関連深かった。

以上より、晩婚化・少子化が進む我が国においても、高校生、大学生の大多数は結婚・挙児を希望している。

若者に対して、結婚や出産に対して前向きな気持ちを持ってもらおうというアプローチを取るとするならば、高校生よりも、結婚や挙児への意識と、自身の経済や健康の関連性がはっきりしてくる大学生の時期に行うことが有効で、また、その際には、今後起こりうる経済的な不安を適切に受け止める力や、自らの身体に起こる変化や食生活・不妊・月経に関する正確な知識、自分の家庭や生活に対する肯定感を持ち、将来のキャリアデザインを描くための知識などを提供する全人的な教育と組み合わせて実施する工夫が有用であろうと考えられた。

以上をふまえ、若い男女を対象に使用できる DVD 教材を作成した。視聴前後で行った知識テストでも良好な向上が認められ、有用と考えられた。また、既存のパンフレットや教員による講義と比較しても遜色なく、内容によっては、より効果的であった。

研究分担者

猪飼周平・一橋大学大学院社会学研究科・准教授

吉川弘明・金沢大学保健管理センター・教授

松浦賢長・福岡県立大学看護学部・教授

高田昌代・神戸市看護大学健康支援看護学・教授

林芙美・千葉県立保健医療大学健康科学部栄養学科・講師

西尾彰泰・岐阜大学保健管理センター・准教授

研究協力者

足立由美・金沢大学保健管理センター・准教授

佐渡忠洋・岐阜大学保健管理センター・助教

堀田亮・岐阜大学保健管理センター・助教

前田利之・阪南大学経営情報学部・教授

宮下ルリ子・神戸市看護大学助産学専攻科・助教

丸岡里香・北翔大学大学院人間福祉学研究科・准教授

仁木雪子・八戸学院短期大学看護学科・教授

加藤千恵子・名寄市立大学保健福祉学部看護学科・准教授

樋口善之・福岡教育大学教育学部・講師

原田直樹・福岡県立大学看護学部・講師

阿部眞理子・福岡県立大学看護学部・講師

増満誠・福岡県立大学看護学部・講師

梶原由紀子・福岡県立大学看護学部・助教

安達久美子・首都大学東京健康福祉学部・教授

有園博子・兵庫教育大学大学院臨床心理学・教授

井上裕子・神戸市須磨翔風高校・教諭
勝木洋子・神戸親和女子大学発達教育学部・教授
甲村弘子・大阪樟蔭女子大学児童学部・教授
武見ゆかり・女子栄養大学栄養学部・教授
佐藤ななえ・盛岡大学栄養科学部・准教授

A.研究目的

近年、我が国では晩婚化・晩産化を伴う少子化が進行しており、2013 年の合計特殊出生率は1.43(厚生労働白書)であった。晩婚化は妊娠適正年齢を逃すことによる不妊の増加を、晩産化は母体の高齢化によるハイリスク妊娠の増加をもたらす要因となりうるため、様々な対策アプローチが必要である。“晩婚化、晩産化を伴う少子化”の現象には様々な社会的要因が関与しており、単純な対応策をうち出すことは難しいであろう。ただ、高齢化が進む傾向にある不妊治療の現場において、「もっと若い時期に、妊娠時期などの人生設計について考える機会を持つことができたならば、結婚や妊娠の時期をもっと早く迎えていたかもしれない」という思いを持つカップルが少なくないと言われる。そこで、本研究では、若い男女を対象に、妊娠・出産などのライフプランに関する教育を行うことの必要性と有効性、教育すべき内容を検討することを目的とし、この結果に基づいた提言をめざした。まず、若い男女の結婚・出産に関する意識や知識の実態を調査し、それに影響を与える要因について分析を行い、必要と思われる教育内容、有効と思われる教育方法について検討した。さらに、この結果に基づいた“若い男女が自ら選択する人生設計について質の高い情報を効果的に提供する”授業教材を作成し、高校や大学での教育現場での有効性についても検証した。

B.研究方法

若い男女を対象とした意識調査のための質問紙の作成(資料1:「若い男女における結婚・出産についての意識調査」の質問用紙と依頼文)

少子化・晩産化の進行に関係すると推察される各種要因の関与を明らかにするための自己記入式質問紙を作成した。

本研究班には、社会学、心理学、学校保健・教育、母子保健・教育、栄養学の専門家が研究分担者として参加しているため、それぞれの専門性に基づいた仮説から質問紙を作成した。対象である高校生と大学生が、理解しやすく回答しやすい質問文・選択肢の設定や質問構成となるよう留意した。

研究分担者の設定した少子化・晩産化の進行要因の仮説から、自己記入式質問紙を下記のような構成で作成した。

1. 学生の基礎情報

無記名のアンケート形式である。しかし、対象者の属性による特徴や啓発情報の必要度の差異を解析する必要性を考えて、年齢、性別、学年、学部、身長・体重、留学生か否か、実家の家族構成を聞く質問を設定した。

2. 生活や意識について

将来、親となる対象者の生活背景や生活習慣を知ることで、将来の健康増進のために必要な啓発すべき事項を知ることができる。そこで、喫煙、飲酒、部活動・サークル活動、運動習慣を聞く質問を設定した。

若い女性のやせ傾向と関係がある低栄養妊婦の増加とそれに伴う低体重新生児の増加は、先進国でわが国だけという特異な傾向がある。将来の母体の健康を守る観点から、「健康的に最適と本人が考える体重」と「外見的に最適と本人が考える体重」の認識を問う質問、体型を気に

することに関する質問なども設定した。社会学的分析に必要となると考えられる事項、すなわち、人生の中で重視することやその優先順位、実家の経済状況、これから10年間の経済的不安、自分の健康状態、健康への関心などについて聞く質問も設定した。

3. 食事や栄養について

将来、家庭を築いて育児環境を整える際に食習慣はその根幹をなすものである。将来、親として子供に健康的な食生活を用意するには、まずは自身の食生活改善のための意識を高め、望ましい行動を増やす必要がある。しかし、食生活はその人の価値観や生き方にも影響を受けることから、質問紙では、現在の食に関する満足度(食事時間の楽しさ、食卓の雰囲気、料理の楽しさ)や食行動(主食、主菜、副菜のバランス、野菜料理の量)だけでなく、過去の食経験(小学生の頃の食生活の印象など)について尋ねる内容とした。

4. 結婚・出産について

現在、進行している晩婚化・少子化を考える際、「結婚を望まない、あるいは子供を欲しくないと考える若い世代が増えているのだろうか？」という疑問が存在する。まず、この疑問に答えるために、将来結婚する意志(いずれ結婚するつもり、一生結婚するつもりはない)や、挙児の希望(子供は欲しい、子供は欲しくない)を聞く質問を設定した。

ところで、わが国では30代で女性の就業率が下がるMカーブ現象が見られ、子育てと仕事の両立の難しさが指摘されている。いったい、若い世代はキャリアプランにおいて結婚・出産・子育てをどのように考えているかを知る必要がある。そこで、仕事と家庭の関係について、仕事と育児の関係について、子供が欲しいと思ったときに不安になることについてなどの質問を設けた。さらに、これらの決定に影響を与える要因を知るために、自身が生まれたときの両親の年齢、自分の育った環境を自分も築きたいかについても聞く質問を設定した。また、不妊症や女性の妊よう力に関する知識を若い世代に提供する必要があるか、提供することにより結婚や挙児に関する決定が変化するかも、不明な点である。したがって、一般的な不妊症、女性の年齢と妊よう力の低下、避妊などに関する知識を問う質問を設定した。

5. 女性の方への質問

女性だけを対象に、女性特有の月経に関連した症状やその自己管理の方法などについての質問を設定した。不妊につながりかねない月経のトラブルをどのように自己管理しているか、そのトラブルを相談する相手は誰かについて知ることのできる質問にした。これらの回答からは、若い女性の健康教育、健康支援のあり方に示唆が得られると考えたからである。

以上のように、若い世代の健康観、自己健康管理能力、結婚や家族に関するイメージ、妊娠・出産に関する知識、女性の健康や人生設計に関する考え方などを明らかにしていくことを目指した。

(1) 若い男女における結婚、出産についての意識調査

全国6校の高校生1,866人(男性1,108人、女性727人、性別無回答31人、平均年齢16.5 ± 0.83歳)、11校の大学生1,189人(男性267人、女性914人、性別無回答8人、平均年齢19.9 ± 1.81歳)合計3,055人を対象に、結婚、出産に関する意識調査を、2014年1～2月の2ヶ月間に実施した。質問用紙は、上記で作成した性別、年齢、家族構成、将来のキャリアデザイン、妊娠、出産、健康観などを含むA4版、全12頁からなる自記式質問調査用紙『**若い男女における結婚、出産に**